

聞き取り資料：兵庫県神河町川上集落による戦中・戦後における 砥峰高原ススキ草原の利用・管理

橋本佳延¹⁾・澤田佳宏²⁾

Utilization and management of grasslands on the Tonomine Highlands by Kawakami community of Kamikawa Town, Hyogo Prefecture, Japan, during and after The World War II: Results of interviews to two old inhabitants

Yoshinobu HANDA¹⁾ and Yoshihiro SAWADA²⁾

要 旨

戦前より火入れによる管理が行われてきた兵庫県神河町砥峰高原における戦中・戦後の草原の利用と管理や、集落周辺での農林業の営みについて、火入れ管理を実施している川上集落の古老に聞き取り調査を行った。結果、(1) 草原の管理については、火入れは戦中に一時途絶えたが終戦後に再開され、火入れ面積は現在の2倍はあったこと、ススキの利用が停止した後も山火事防止や観光目的で火入れが継続されてきたことなど、(2) 草原の利用については、ススキだけでなく盆花や山菜、薬草などが採集されていたこと、ウサギやヤマドリ、キジ、マムシなどの小動物の狩猟が行われていたこと、採集されたものは販売せず自家消費していたことなど、(3) 集落の農林業の営みについては、集落周辺の草地で農耕用の役牛が放牧されていたこと、昭和35～36年頃まで炭焼きが行われていたこと、終戦前後の時期に焼き畑が行われていたことなど、が明らかとなった。

キーワード：火入れ、茅、採集、放牧、牧畜、炭焼き、焼き畑

(2016年7月31日受付, 2016年10月15日受理)

はじめに

わが国における草原は明治以降減少の一途をたどっており、1880年～1900年頃には900万haあった草原面積は2000年代になると42.7haにまで減少している(小椋 2012)。減少の原因は様々だが、開発行為や植林によるほか、草原利用の停止にともなって火入れや刈り取りといった草原を維持するための管理がなされなくなったことが主要因としてあげられる。

草原面積の減少傾向は兵庫県でも同様で、その面積は県土面積の約1%を占めるに過ぎない(環境省自然環境局(編) 2004)。特に比較的大面積に残る山地のススキ草原は、日高町・神鍋山火口付近(豊岡市)、上山高原(新温泉町)、東鉢伏高原(養父市)、鉢伏高原(養父市)、杉ヶ沢高原(養父市)、砥峰高原(神河町)、東お多福山(神戸市・芦屋市)など(兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課 2010)、その数はわずかとなっている。これらの大規模草原はそのものが消失の危機にさらされている

¹⁾ 兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部 〒669-1546 三田市弥生が丘6. Division of Ecological Restoration, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Yayoigaoka 6, Sanda, Hyogo 669-1546, Japan
E-mail: quercus@hitohaku.jp

²⁾ 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 〒656-1726 兵庫県淡路市野島常盤 954-2. Graduate School of Landscape Design and Management, University of Hyogo, Nojima-tokiwa 954-2, Awaji, Hyogo 656-1726, Japan

重要な生態系である（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課 2010）。加えて、草原は他の生態系と比較して面積が小さいものの単位面積あたりの絶滅危惧植物数は非常に高いことが知られており（兼子ほか 2009）、これらの大規模草原は兵庫県下の植物の種多様性を保全する上でも重要な環境といえる。また草原面積と草原生植物の種多様性の間には正の相関関係があり（山戸ほか 2013）、種多様性の保全にあたっては、これらの草原は可能な限り大面積で維持することが望ましい。

大規模面積の草原を維持するための管理方法としては火入れが一度に大面積を処理できる点で優れている（高橋 2005）。しかし、兵庫県で火入れが行われている草原の数は、かつてより火入れが継続実施されている鉢伏高原、神鍋山火口付近、砥峰高原や、近年に火入れを再開した上山高原を含めてもわずかである。これらの草原では、管理の担い手の高齢化や減少などの課題を抱え、火入れの技術の継承や実施の体制は盤石とはいえないため、今後、兵庫県下で行われてきた火入れによる草原維持の営みの文化が失われる可能性が高い。

そこで本調査では、かつての火入れの実態を明らかにし、兵庫県内における草原の火入れ文化や大規模な草原生態系の保全技術を継承に資することを目的として、現在もなお火入れによる草原管理が継続されている兵庫県神河町砥峰高原において火入れを実施している神河町川上集落の古老に対して昭和時代の草原の管理や利用の状況、集落における農林業の営みについて聞き取りを行ったので報告する。

調査地概要

兵庫県神河町砥峰高原は兵庫県の中央部に位置する砥峰（標高 972.1m）の南方の標高 800 ～ 850 m の範囲に位置している。本地域は、鈴木（1962）の日本の気候区分によれば中緯度準裏日本気候少雨区に含まれ、冬季の西高東低の気圧配置が強い場合には降水（降雪）があるが弱い場合にはない気候を有する。また坂田（1995）によれば内陸気候地域（IV.a1）に属しており、瀬戸内気候地域と比較すると気温が低く、降水量の多い気候を有する。砥峰高原の地形は、起伏の不規則性、鋭い稜線をもつ三角錐状の小丘、低地を埋める花崗岩砂とその表面の平坦さなど、通常の高原には見られない起伏が特徴的な、鉄穴流しによって生じた人工地形であって、兵庫の貴重な自然（地形）の B ランクに指定されている（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課 2011）。現在、砥峰高原には 90ha のススキ草原が広がっており、貴重な植物群落（群落複合）の A ランクに指定されている保全上重要な生態系である（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課 2010）。ススキ草原は毎年 1 回、春季に

行われる火入れによって維持されている。当地の火入れは 1998 年より一般公開され、神河町の春の観光資源として重要な行事となっている。

砥峰高原のススキ草原は、明治 15 年（1882 年）頃より放牧地として開発され、維持・管理がされてきた記録があり（大河内地点自然環境調査団・（株）新日本技術コンサルタント 1978）、ススキ草原は少なくともそれ以前より維持されていたと推測される。現在は、砥峰高原は、兵庫県立の自然公園である雪彦峰山県立自然公園の一部であることから（兵庫県ホームページ http://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/JPN/apr/hyogoshizen/park/park_seppiko.html, 2016.7.29 確認）、その管理主体は兵庫県となっているが、晩秋の防火帯刈りおよび早春の火入れの実作業は兵庫県より委託された川上集落が実施している（2016 年 7 月現在）。

調査方法

聞き取り調査は兵庫県神河町川上集落出身で現在も在住の 2 名の古老（以下、A 氏と B 氏と呼称する）を対象に行った。A 氏は昭和 11 年（1936 年）生まれで、昭和 20 年（1945 年）の終戦を川上集落で迎えている。義務教育課程を卒業後、昭和 27 年（1952 年）から左官業として神戸に移住したが、昭和 35 年（1960 年）に父の死去により川上集落に戻るものの、再び職業を得るために神戸に移住されている。現在は川上集落内に住み、平成 14 年（2002 年）から平成 22 年（2010 年）まで、とのみね自然交流館に館長として勤務していた。B 氏は昭和 8 年（1933 年）生まれで、戦時の混乱で小学校 3、4 年の頃に学校で炭焼きをさせられた経験を持つ。32 歳まで専業の炭焼きを職業としており、川上集落に暮らし続けている。聞き取り調査時は、老人会会長を務めていた。

聞き取りは平成 24 年（2012 年）1 月 15 日に神河町川上文化会館にて、聞き取り対象者 2 名と川上集落区長（当時）、調査者 3 名が同席のもと、自由な対話形式で 3 時間 30 分かけて行った。聞き取りでは、調査者が砥峰高原内のススキ草原の動植物・自然物の利用や、草原での管理（火入れや刈り取り）、集落周辺部での農林業の営みなどの項目について質問し、対象者は集落での言い伝えや自身の経験をもとに回答した。聞き取り結果は調査者による筆記記録にくわえ、IC レコーダーにて音声を記録した。音声記録は後日文字起こしし、発言者ごとに発言内容を箇条書きに整理した。聞き取り結果は発言内容を大きく「草原の管理」「草原の利用」「集落での農林業の営み」「そのほか」の 4 つに分けて整理し、一覧表にまとめた。

結 果

聞き取りの発言内容を整理したものを付表に、その概要を項目に分けて下記に示した。なお、とりまとめにあたっては生物の方言名についてひらがなで表記し、読み替えが可能なものは方言名の後に標準和名をカタカナ表記で添えた。

I. 草原の管理

1) 火入れ

火入れは戦前より実施されていたが、戦中は徴兵による青壮年者の減少のため一時中断した。火入れは、終戦後の青壮年者の帰郷によって再開し、現在まで続いている。

実施主体は川上集落で、火入れは観光化される1998年までは川上集落内に設置された協議会により実施された。火入れ作業には川上集落にある全戸（約100戸）より1人ずつ参加した。砥峰高原に隣接する峰山高原の火入れについては川上集落ではなく小田原集落が実施した。

火入れの実施時期は現在と変わらないが、火入れの実施日が固定されていたわけではなく、雪が溶けて2日ほど好天が続いた後に実施した。実施日は区長と協議会の役員が天候を見て決定していた。火入れの準備中に雨が降り、延期になることが何回も起こっていた。火入れ面積は、現在の砥峰高原の面積の2倍はあった。

防火帯刈りは、火入れの際に草原に隣接する森林へと飛び火して延焼しないように草原と森林の境界の帯状に刈り取る行為である。防火帯刈りは、当時は主に女性が行う仕事で、火入れを実施する日に作業を実施した。草原以外に延焼すると消火が大変であり、また他の集落にも迷惑がかかることから、火入れは全員が真剣に取り組む行事であった。

延焼防止に使う火消し道具は「ほでくぼう」（写真1）といい、飛び火した火をたたいて消すもので、現在も用いられている。「ほでくぼう」は、柄はケヤキ、火をたたく部分はクズの蔓や稲わらで出来ており、クズの蔓は適期に刈ったものを使うと2～3年は利用できた。

火入れ管理は茅の利用が停止した以降も続けられていたが、その主な目的は山火事防止であり、不審火を予防するために燃え草となる枯れ草を事前に除去するために焼いていた。1998年以降は、火入れが一般公開されて観光化し、観光資源維持の目的も追加されている。

II. 草原の利用

砥峰高原は川上集落の住民にとってなくてはならない生活の糧であって、屋根葺き用の茅（ススキ）、果物、山菜、薬草、花など様々なものを採集した。

1) 茅（ススキ）

ススキを刈り取る時期については、刈り取り解禁日が11月の第二亥子の日（11月20日過ぎ）と決まっていた。刈り取る時期が早すぎるとススキに青い部分が残っているので全部枯れてから刈り取っていた。屋根の葺き替えは夏にするため、茅刈りはススキが芽吹く春、5月頃まで行われていた。

ススキの草丈は、当時は3mほどあり、大きいものでは4mほどあった。また砥峰の茅は屋根葺き用途に向いていて質がよいと認識されていた。

山開きの日（刈り取り解禁日）には、よく切れるように前の晩によく研いだ鎌とお弁当を持って、家族総出でガスランプをつけて夜明け前から草原に行き、ススキの成長が一番よいところに陣取って日が暮れるまで刈り取り作業を行った。山開きの日に刈り取ったススキは束にしてツボキと呼ばれる状態（ススキの束を一つのところに寄せて立てて、先をくくって束ねたもの）にしていた。他人と茅刈りで競争となり争いごとになるようなことはなく、盗むことも絶対なかった。山開きの日にすべてを刈り尽くすことは出来ないため、何日も高原に通ってよい茅がとれる場所から順番に刈り取っていた。刈りきれないススキが山焼きの時期まで残っていた。

刈り取ったススキは「おいそ」（他地域では「おいこ」とも呼ぶ）を使って人の背中に背負って下ろしたり、ス



図1 ほでくぼう

スキの束をわらでくくり、先を持って草原のてっぺんから引きずって下ろしたりして集落まで運搬した。

茅（ススキ）の利用目的は屋根葺きと炭俵づくりがほとんどであった。炭俵に用いる茅以外は屋根葺きに用いられた。当時は集落の家はどこも草屋根で、年に1～2軒が頼母子で屋根を葺き替えていた。周りの家は屋根を葺き替える家にお祝いとして茅を2～3カ（「カ」「束」は茅の量の単位で、1カは2束分、1束は茅一抱え分をさす）と酒1本を持っていった。それでも屋根葺きに足りない場合は、屋根を葺き替える家の者が茅を刈り取ったり、人に頼んで茅を作ってもらったりして賄っていた。刈った茅は1年間で使い切っていた。川上集落で茅葺き屋根を葺き替えたのは昭和36年（1961年）が最後で、現在も茅葺き屋根の家屋はあるものの、トタンが被せられている。

炭俵に用いる茅は、刈り取った後に家の周りに立てて乾燥させていた。炭俵の長さは70cm程度なので、炭俵に使う際は、3mの茅を3回折り曲げてからわら縄で打っていた。4mの茅は太いため、炭俵編みに向かない根元の太い部分は切り落として先の3mを使用した。

茅は昭和35～40年（1960～1965年）くらいまでは利用したが、それ以降は利用していない。

2) 採集

砥峰高原では茅の採集以外に盆花や山菜、薬草の採集が盛んに行われていた。盆花としてはキキョウやオミナエシが採集され、幼少期に祖母に頼まれて砥峰高原まで取りに行くこともあった。そのほかみられた草花としては、ササユリ、なでしこ（カワラナデシコ）、あやめ（ノハナショウブ）、ウメバチソウ、ヤマツツジ、リンドウ、ギボウシ類、センブリ、アケボノソウ、オニユリなどがあった。

山菜など食用として採集したものとして、クリ、くるみ（たにぐるみ）^{注1}、アケビ類、やしゅぐみ、やまぶどう^{注2}、じいちご^{注3}、さがりいちご^{注4}、ナナカマド、さんきらい（サルトリイバラ）、ササユリ（根茎）、いつき（実）^{注5}、ケンポナシ、ミツバ、セリ、ヨモギ、リョウブなどがあげられたが、これらには草原内だけでなく森や田畑の周辺で採集したものも含まれていた。アケビは実だけでなく、つるや葉を焙煎してアケビ茶（当地ではでんでん茶と呼ぶ）として飲用した。アケビは5月の終わり頃に採集、焙煎して1年分のお茶をつくっていた。

川上集落は無医村であったため、薬草を採集して怪我や病気に対処した。薬草としてはセンブリ、オウレン（胃腸薬として飲用）、ドクダミ、ゲンノショウコ、キハダ（解熱）、マタタビ（腎臓の薬として）、フキ（傷薬として）、いしゃだおし^{注6}などを利用した。特にオウレンについては集落外の人間が採集したいとたびたび申し入れ

ることがあった。薬草以外ではムカデの油やマムシなども薬用として利用した。

採集はもっぱら自家消費のためであり、出荷などはしていなかった。

3) 狩猟

狩猟は、主に終戦前後の時期に砥峰高原や集落の周辺で行われていた。狩猟の対象はウサギやヤマドリ、キジ、マムシ、イノシシであった。ヤマドリやキジは成体を罠で捕まえるだけでなく、卵を採集して食用としていた。罠は「わさ」「わさかけ」とよばれ、罠の種類は「はねわな」で鳥が足で踏むと罠にかかるしくみであった。

マムシは体にとってもよいと認識され、食用だけでなく薬用としても利用されていた。マムシを食用とする場合、肝は捕獲・解体時にそのまま飲み、皮をむいた身や骨はきれいに裂いて干して乾燥させていた。乾燥させた身と骨はもち米と黒豆と合わせて白でひいてはったい粉にして食べたり、茶碗蒸しに入れて食べたりした。

銃猟は、裕福な人（集落で10人程度）が行っており、イノシシの追い込み猟をしていた。

4) 移動・運搬

砥峰高原までは現在の39号線が出来る前は、ハタギリ橋から入る旧道を使って約25分から30分で移動していた。

運搬に利用する道具はわらで編んでつくられた前述の「おいそ」（写真2）で、これに前掛けやドンゴロス（麻袋）、びくなどを入れて山菜摘みなどに出かけていた。

III. 集落での農林業の営み

1) 牧畜

川上集落では多くの家が農耕用の役牛を飼育していた。財産のある家には牛小屋があった。昭和30年代ぐらいから耕耘にトラクターを使うようになり、牛を飼う世帯は昭和35年頃には減っていた。

牛は、集落の近くにある牛放し場で放牧しており、牛は朝放し、晩に連れもどしに行っていた。牛放し場は集落共有の山で、1番組から6番組まで分かれており、1組あたり15～16軒で管理した。牛放し場の中には草地があり、牛のえさとなるススキのような植物が生えていて、放牧時に牛に食ませただけでなく、朝早くから牛のえさを刈り取りに行くことがあった。牛放し場の入り口には高さ2mくらいの棒で丸太を組んだ木戸があり、ワイヤーでつって開閉していた。牛を放した後は晩まで山で草を刈りに出かけ、放牧中に牛の見張りをする人はいなかった。放牧地でも火入れは実施しており、砥峰高原の火入れと同じ日に、砥峰高原を焼いた後に、それぞれの番組で焼いていた。

放牧は昭和34年くらいまでは行われていたが、その後は牛放し場はスギの植林地となった。

2) 炭焼き

川上集落にはかつては 100 戸ほどあったが、そのうち 70 軒ほどが炭焼きに従事し、白炭を焼いていた。

炭焼きにはナラ材を用いており、浅木（サクラやリョウブなど）と雑木、ホウソ（ナラ材）とで価格が違っていた。材の伐採はノコギリや鉋を使用した。ノコギリの目立ては砥峰で採集した砥石を使って自分たちで行っていた。

炭焼きを行う山は一枚場という単位で数えており、一枚場あたり炭を 300 俵から 600 俵程度生産することが出来た。山ごとにある古い炭焼窯を炭焼きに使用した。新しい窯をつくる際には古い窯の焼け土を利用しないと窯が割れて落ちてしまう。炭焼きを行う者は、古い窯のある山を一枚場いくらと決めて山主より借りていた。

炭焼きは一年中行っていた。毎日、朝に材を切り出し、窯に火を入れて、一晩までに炭を焼く、の作業を繰り返した。

生産した炭の多くは農協に出荷しており、「秀」「優」「良」の規格があった。また品評会も開催されていた。

炭焼きは昭和 35 ～ 36 年まで行われていたが、ガス、練炭、豆炭の普及とともに廃れた。

3) 焼き畑

川上集落における焼き畑は、終戦（昭和 20 年）前後の一番物資が乏しい時代に行われていた。焼き畑を行っていた場所は、スギの植林地の伐採跡地で、残っている枝や切り株などの木をきれいに焼いてから作物の畑にした。焼き畑は何軒かで共有していた。

作物はダイコン、ソバ、キビ、アズキなどだった。ダイコン畑を 2 年ほどしたあとに再びスギ植林にしていた。

焼き畑では夜間にシシ番（作物をイノシシから守る監視）が行われていた。シシ番は主に祖母らが担い、夜に 2 ～ 3 人が交替で焼き畑に出向き、イノシシを寄せ付けないように大声でわめいたり一斗缶を打ち鳴らしたりする役割だった。アズキがよく被害にあった。その頃

はシカによる害はなかった。

IV. そのほか

川上集落の主な産業は明治初期ぐらいからは養蚕業、林業であった。水田以外の畑は桑畑であった。

戦中には、小学校でも児童が炭焼きを行っており運動場もハトムギや大豆、芋などの畑となっていたために運動会も出来なかった。

砥峰高原と川上集落とでは気候、気温が異なっている。かつては気温が -15℃まで下がったことがある。少しの雪でも 50cm 積もることがあり、中学校時代には砥峰高原までスキーをしに遊びに行った記憶がある。

まとめ

本稿では兵庫県神河町砥峰高原および川上集落における戦中から戦後の昭和 30 年代後半頃までの、草原の管理と利用、集落周辺の農林業の営みについて、古老への聞き取りによって明らかになった内容を整理した。

草原の管理についてみると、現在とかつての管理方法の共通点として火入れを早春に行っていることが確認されたが、相違点として現在よりも管理面積が 2 倍と広がったこと、防火帯刈りは現在のように晩秋に実施するのではなく、火入れ直前に実施していたことが明らかとなった。

草原の利用についてみると、主要な利用目的である屋根葺および炭俵用途の茅の採集だけでなく、盆花、山菜、薬草の採集、ウサギ、ヤマドリ、キジ、マムシなどの狩猟など多様な利用形態が確認された。現在、砥峰高原では上記のような多様な用途での利用は失われてしまっているが、早春の火入れの見学客や、秋にはススキの穂が広がる景観を楽しむハイキング客が多数訪れるほか、映画やテレビドラマなどのロケ地としての注目度も高まっており（<http://www.kamikawa-kankonavi.jp/loca/>）、観光資源としての利用が進められている。近年では、県内の茅葺き屋根を葺き替える際に用いる茅が不足していることから、砥峰高原でも屋根葺き用途の茅の採集が試験的に実施されるなど、かつての利用のあり方も見直されつつある。

集落周辺の農林業の営みでは、農耕用役牛の牧畜、焼き畑、炭焼きなどが昭和 30 年代後半を境に集落より姿を消していったことが明らかとなった。特に炭焼きが行われなくなった時期は国内他地域で炭焼きが停止した時期とほぼ重なり（養父 2009）、プロパンガスをはじめとする化石燃料の全国的な普及が主要因と推測される。

本調査で、砥峰高原のススキ草原およびその周辺での、かつての管理・利用の知識や経験の多くが失われつつあることが明らかとなった。この傾向は兵庫県の多くの大



図2 おいそ

規模草原でも同様と思われ、また当時の状況を知る方々の高齢化も進んでいることから、他の草原地域でも今回の調査と同様の聞き取り調査によって、かつての草原と人との関係を記載し、大規模草原の今後の適切な管理・利用に必要な知識や経験を伝える取り組みが急務といえるだろう。

謝 辞

本調査にあたって神戸大学大学院院生の永田優子氏には聞き取り調査にご同行いただきました。また大山亜紀氏には音声記録の文字起こしにご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

注

- 1) 神河町の植物相から、オニグルミと推測される。
- 2) 神河町ではヤマブドウの分布は確認されていない（福岡ほか（編）2003）ことから、食用となるブドウ属のエビヅルやサンカクヅル、アマヅルが該当すると推測される。
- 3) じいちごは実が赤いとの説明があり、神河町にみられる食用となる赤い実をつけるキイチゴ類としてフユイチゴ、クマイチゴ、クサイチゴ、ニガイチゴ、ナワシロイチゴ、エビガライチゴが確認されている（福岡ほか（編）2002）が、推定することは出来なかった。
- 4) さがりいちごについては「実は黄色い、金平糖ぐらいの大きさ、キイチゴ」との説明があり、本地域の植物相（福岡ほか（編）2002）からナガバモミジイチゴと推測される。
- 5) 「いつき」はケヤキやミズキ、ヤマボウシのことを指す植物の方言名だが（八坂書房（編）2001）、本稿の聞き取りでは「熟れたら赤くなる」とあり、食用となる赤い実がなるヤマボウシのことと推測される。
- 6) 「いしゃだおし」は「いしゃたおし」「いしゃいらす」「いしゃこ（ご）ろし」と同類の植物の方言名であり、ゲンノショウコ、ハブソウ、アロエ、キランソウ、ドクダミ、ミヤマフウロ、ミヤマトベラ、エビスグサなどをさす（八坂書房（編）2001）。本稿の聞き取りでは、いしゃだおしは「しゅっとして葉も大きくない。雑草みたい。」「春に花が咲く」と説明されていることや、ゲンノショウコ、ドクダミは認識されてい

ることからキランソウのことと推測される。

引用文献

- 福岡誠行・黒崎史平・高橋晃（編）（2002）兵庫県維管束植物目録4. 人と自然, **13**, 131–184.
- 福岡誠行・黒崎史平・高橋晃（編）（2003）兵庫県維管束植物目録5. 人と自然, **14**, 111–162.
- 兼子伸吾・太田 陽子・白川 勝信・井上雅仁・堤 道生・渡邊園子・佐久間智子・高橋佳孝（2009）中国5県のRDBを用いた絶滅危惧植物における生育環境の重要性評価の試み. 保全生態学研究, **14**(1), 119–123.
- 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課（2010）兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2010（植物・植物群落）.（財）ひょうご環境創造協会, 神戸, 217 p.
- 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課（2010）兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2011（地形・地質・自然景観・生態系）.（財）ひょうご環境創造協会, 神戸, 94 p.
- 環境省自然環境局（編）（2004）日本の植生Ⅱ 第5回自然環境保全基礎調査植生調査報告書（全国版）. 財団法人自然環境研究センター, 東京, 346 p.
- 小椋純一（2012）森と草原の歴史 - 日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか -. 古今書院, 東京, 343 p.
- 大河内地点自然環境調査団・（株）新日本技術コンサルタント（1978）大河内地点自然環境実態調査報告書.（株）新日本技術コンサルタント, 大阪, 208 p.
- 坂田 正（1995）兵庫県の気候. 橋本光正（編）, 兵庫県の樹木誌. 兵庫県農林水産部局林務課豊かな森づくり推進室, 神戸, pp. 384–388.
- 鈴木秀夫（1962）日本の気候区分. 地理学評論, **35**（5）, 205–211.
- 高橋佳孝（2005）半自然草原の現状と保全への取り組み. 国立公園, **638**, 4–7.
- 養父志乃夫（2009）里地里山文化論（下）循環型社会の暮らしと生態系. 農山漁村文化協会, 東京, 223 p.
- 山戸美智子・江間 薫・武田義明（2013）近畿地方中部の半自然草原における面積と種多様性、種組成の関係. 植生学会誌, **30**(2), 119–126.
- 八坂書房（編）（2001）日本植物方言集成. 八坂書房, 東京, 946 p.

付表 聞き取りの内容詳細一覧 () 内は調査者による注釈。

大項目	中項目	小項目	発言者	発言内容(要約)
草原の管理	火入れ	歴史	A氏	(戦中は)その当時はそういう段取りする若い人がいなかった。学校の生徒は70〜80人いた、私が5年生の時に全校23人。その頃は事実上なかったと思う。そういう記憶がない。戦争からお父さんが戦争から戻ってきてから火入れを再開した。
		実施主体	A氏	火入れをイベント化する前は(川上区の)協議会でやっていた。
			A氏	砥峰は川上集落全員、100軒。1番組は20戸、林組は30戸、4・5・6組で25〜30戸、一つの家からは一人が出る。
			B氏	(峰山高原の草原の管理は)小田原の集落が行っていた。
	実施日の判断		A氏	昔は雪がよく降った。焼く時期は今と変わらない。雪が解けたら火入れしていた。(火入れの実施日は)区長を先頭に協議会の役員で決めていた。
			B氏	(火入れの日程は)天候見て、2日ほどいい天気が続いたから明日しようかと言っていた。今はそうはいかんわね。
			B氏	山へ行ったら雪が降って戻れなくなったのを3回ほど知っている。一時に降らないで、砥峰上がってしまいたら、暗くなったと思ったら降ってきて焼かないで戻ったこともある。決められた日に雨が降って日が延びたことは何回もあるけど。
	防火帯刈り		A氏	(天候が)穏やかな日でも火を入れたら風がすごい。今と違ってカヤが茂って背が高い。カヤの先がポイッと横の山に移るとそこが火の海。砥峰だけの火ならいいけど、他所に移った火を消すのが大変。山焼きはみんな正念入れてやっていた。
			B氏	今は刈り切り言うて焼くまでぐるぐる刈ってきれい掃除して。昔は刈り切りはなかった。火付ける前に女の人が刈って、えらかったと思う。火入れるのと刈り切りを同時にしていた。
	面積・延焼防止		A氏	(火入れ面積は)今以上。植林で木が大きくなってわからないが、砥峰以上である。地形も悪いし、焼く場所が隣ひとつしたらよそ(他の集落)の山だから、火が絶対移ってはいらない。それが大変。境界をあけて、境界のできるだけ縁から焼いて行こうとする。縁から少しずつ焼いて、消していく。
			B氏	砥峰高原の今火入れしているのは、半分くらい。今見えているのが半分。あの倍ほど焼いていた。大沼小沼(オノマコノマ)、ユデという場所も焼いていた。
草原の利用	全般	火消し道具	A氏	火を消すのに「ほでくぼう」で消していた。「ほでくぼう」の柄はケヤキ、結ぶのはクズバ、稲わら。風が吹いたら火が飛ぶ、(飛び火を)消すのに(ほでくぼうで)どんどん叩いて大変だった。今も山焼きの時には持っていく。蔓は時期の良いときに切る。2年〜3年持つ。
		現在の目的	区長	あとはハイカーの火を落とされたら危ないから、(現在は)山火事を防ぐために先に焼く。
			A氏	ハイカーが火をつけて、すごい焼けたことがある。夜中焼けて、そういう時期もあった。
		実施体制の変化	A氏	火入れをイベント化して今年(2012年)で14年になる。
	茅	刈り取り時期	A氏	砥峰高原は私たちの生活の食糧だった。ススキは集落の屋根の茅葺き、山の果物、山菜、葉草、花も全部砥峰で採れた。
			A氏	(刈り取り開始日は)11月の第2亥の子と決めて日を決まってる。11月20日過ぎやった。その日からカヤ刈っていいという規約があった。
			B氏	屋根替えは夏にするから、芽が出るまでの、春、5月頃(まで)に刈ったもの。炭も朝早くから行った。山開きは、12月の冬至を境にカヤ刈りに行ってもよいとなっていた。雪がありました。それまでは入れず、早かったらまだ青い所が残っているの、全部枯れてカヤになってから。
		大きさ	A氏	(その頃のススキの青丈は)3mくらい、大きなものでは4mくらいあった。毎年火を入れても3m位になっていた。
		刈り取り	A氏	(カヤは1日で刈りきることは出来ず)何回も刈に行く。その日(山開きの日)に(ススキの成長が)一番いいところへ行く。
			A氏	3〜4日で刈り尽くされることはなく、今よりももっとと生えてたからたくさん。次にええところ、次にええところから刈っていく。規約で決まってる日が、一番ええ所、よく伸びている所、一番刈出しやすい所を見分けていた。
			A氏	4人カヤの中に入って、交流館の前の谷に陣取って、夜が明けるとあっちでもこっちでもそういう人が待っていた。自分らが一番と思ったら、1日カヤを刈って、そのカヤを10はい20はいを束にして、ツボキ言うて一つのところに寄せて立て、先をくくってこけんようにして帰る。少し持って帰るけど、カヤはまだ青いし重いから置いて帰る。それが私の仕事。毎日おろして。砥峰焼いて、横畑を牛の草のために焼いて、そのてっぺんから引きずっておろした。わらでくくって、先を持っておろしていた。
			B氏	私の所は何回も刈にいきよった。山開きの刈る日が来たら、それからあとは何回でも、1回では刈れない。また帰らなかんし。

付表 聞き取りの内容の要約—一覧表 () 内は調査による注釈。

大項目	中項目	小項目	発言者	発言内容（要約）
茅	刈り取り	A氏	明け方から行って刈り取るために弁当を持って行く。お屋のためにいちいち降りない。時間が惜しい。カヤは11月では青いから重たい。束を小さくして持って降りる。その時分、39号線の細い公園道を通って、3mを背負うて、体をこないして（注）かに歩きして）下りより上った。道が狭いから、暗くなるまで仕事は当たらなかった。5時までなんて驚呆は言うてられへん。	
		A氏	物心ついた時期に、親父、母親、お婆さんと4人、電気がなかったからガスランプつけて、家を4時頃出て、横畑の動物の通るような道を通って、夜が明けるまで良い場所、茅のよく刈れる場所を陣取る。	
		A氏	だいぶ刈りよった。前の晩からカマ研いで、よう切れるようにして。おいそを持っていきよったから。残りつぼきにして。昔はすごかったんやススキが。	
		A氏	山焼きするときにカヤがあったから、冬が来ても刈り残されたものはあった。	
		A氏	茅刈りで競争になって他人ともめるとはなかった。あんたも来とったんかと話して、盗むことは絶対にない。	
		B氏	（刈った茅は）人の背中に背負っておろした。	
		A氏	その（注）草原の）てっぺんから引きずっておろした。（茅の束を）わらでくくって、先を持っておろしていた。	
		B氏	屋根と炭俵がほとんどであった。	
		B氏	昔はどこも草屋根だった。今の屋根は瓦、トタンで、カヤ屋根は見ることはないが、昔はどこもカヤ屋根ばかりだった。	
		B氏	カヤは出荷していなかった。炭俵以外は屋根に、年に1〜2軒が書き替えていたから、村の「たのもし」といって屋根替えしてよい1カが決まっていた。村中から刈り取って持ってきてもらう。	
炭俵	炭俵	B氏	だいぶ多い。束を2カずつ持っていたから、2束が1カ。ふた抱えて1カ。足らないところは屋根替えする家で自分のところを刈ったり、人に頼んでカヤを作った。部落の各1軒から2〜3カほど持って行った。	
		A氏	川上地区で茅書き屋根をしたのは昭和36年が最後。茅書き民家はまだある。トタンをかぶっている。	
		A氏	砥峰のカヤは（屋根書き用途に向いていて）質がよい。	
		A氏	屋根書きの家にお祝いとして持って行ったり。昔、たのしみに、1カ2「おい」持って、酒1本お祝いして持つて行くと、今度自分のところにもしてもらおうという約束事。その年の内に使い切ってしまう。	
		A氏	持って帰って家のぐるりに立てて、乾燥させて、それを炭焼きの俵にする。	
		B氏	ダツの長さが、編んだ高さが70cm。	
		A氏	3mのカヤを編んで、炭俵が70cmとしたら3mのものを3べん折って、1本1本、当時はビニールがなかったから、わらをうつ。これを夜なべするんやが、ようやられる。4mだと茅が太い、ダツにしてもそれだけ太かったら、そこ（太い根元の部分）はのけて、上の3mを使う。炭俵はカヤを固いまま折って、4mくらいあると先の方で切って、折れるだけにして、ずっとわらで、なわで編んでいく。	
		区長	昭和35〜40年くらいからはカヤを使っていない。	
		B氏	（屋根や炭俵以外には何に使っている？の問いに対し）川上では良い家の塀の垣にカヤカアシを使っていた。	
		採集	山菜	B氏
A氏	盆になったら花を探りに行く。花は売るんやなくて、お婆さんが盆の花をとりに行ってくれと言っていて一人で採りにいった。			
A氏	（盆のお花を探るのは）その当時からだった。小学校。			
A氏	砥峰の花は、ササユリ、ナデシコ、オミナエシ、キキョウ、アヤメ、有名なウメバチソウ、ヤマツツジ。リンドウはお客さんがすごい喜ぶ。ギボウシ、センブリ、アケボノソウ。山の果物として、私らがよく食べたものは、クリ、クルミ、アケビ、やつやくみ、これがうまい。ヤマブドウ、じいちご（実は赤い）、さがりいちご（実は黄色い、金平糖ぐらいの大きさ、キイチゴ）。サガリイチゴは去年食べた。ナナカマドの実は生で食べる。さんきらい（サルトリイバラ）の実、もちのふたにしていた。ハート形の葉で、ご飯やもちを包んだりしていた。実は黄色いところに食べるとよいが、それまで待てないで青いものも食べた。砥峰にはササユリがすげえあった。ササユリの芋、ユリネがうまい。（ヤマユリは）5つくらい花が咲く、根が太くよく食べた。大きなものだとして5〜6本持って帰って、すこい匂いがする。親父にとっ			
B氏	て来るのと怒られたことがある。オニユリもあるがオニユリのユリネは食べない。今も咲いているところある。私が平成14年に行ったときにはササユリはあっちこちに咲いていた。			
A氏	ケンボナシもある。それらを持って帰ってきても、兄弟でしがむ。大人も霜が降りるころには山へよく行って採っていた。			

付表 聞き取りの内容詳細一覧 () 内は調査者による注釈。

大項目	中項目	小項目	発言者	発言内容 (要約)
草原の利用	採集	山菜	B氏	学校から戻っても本見てたら、親が本読むのは極道やと言われて怒られて、畑や田んぼでミツバ、セリ、ヨモギなど口に入るものをみんな取りに行つて、でもみんながとるからとるもんあれへん。山へ行つてリョウブという木の葉を採つた。
		アケビ	A氏	お茶は、アケビがなる時期、1mほどになる頃に、お茶の葉を取りに行く。アケビ茶（でんでん茶と呼んでいる）は、蔓を50cmくらいで切つて摘んで、押し切りで3cmくらいに切つて、煎り釜でゆでる。この小学校では1年間飲むお茶を取りに行っていた。5月の終わり頃から、香ばしくてうまい。釜に水を入れずに煎る。ある程度煎ったら、むしろに広げて、手で揉んで、乾燥させて、缶に詰めて、1年のお茶とする。今のいい茶は最近、私たちの小さい頃はそんなお茶だった。（アケビは）軸が固い。軸ばかりだがそれを茶にするから栄養もある。低峰からずっと下へ降りてアケビ取りに行つたこともあ
	自家消費	山菜	A氏	山菜等は出荷していない。ここは無医村で、私たちは行ってない。
		薬草	A氏	薬草は、センブリ、煎じて飲む。オウレンも、これらは高級な薬草。自分とどこでとるだけ。オウレンは胃腸薬、ドクダミ、ゲンノショウコ、キハダ、キハダは熱が出たとき。マタタビの蔓の皮をむいて乾燥させて、煎じて飲むと腎臓に効くようだ。家内が飲んだと言っていた。
			B氏	オウレンは今でもある。
			A氏	昔は他所からオウレンひかしてくれとよく来た。
			B氏	傷しても薬と言ったらフキの葉を揉んでその汁つけてくくるか、父親がタバコを吸っていて、昔巻きたばこはないから、たばこを傷口に付けてくくったり。ムカデの油、ムカデをとって油の中に入れて、マムシが良かった。
			B氏	イシヤダオシという草をつけたら医者でもかなわんという。
			A氏	（私の指を怪我したときは）お婆さんがフキの葉で揉んで汁をかけ、板を当てて治した。
			A氏	（イシヤダオシは）きれいな花でなく、しゅつとして葉も大きくない。雑草みたい。そういう葉で大きくなかなあかとよくお婆さんに言われた。イシヤダオシやセンブリも。春に花が咲く。ともかくフキの葉を傷に巻く。
	無医村		A氏	ここは無医村で、私も小学校6年生までは病院へ行つたことない。熱が出ても薬草で治した。
			B氏	部落に医者がないし、歩かないと医者に行けないから医者にいかんと。
	狩猟	ウサギ、ヤマドリ	A氏	私、小学校2年生で山ウサギを捕つた。昔は良くいた。山ウサギもヤマドリも、低峰ではない。前から父親からウサギや鳥をとって料理の仕方をおしえてもらつた。蚕を飼うために網を間に挟む針金を外して、わさ（罿）をかけたなら、それに大きなやつがかかつて、それが一生私の頭の中にある。それを持って帰って自分で料理して、肉を外して骨を金づちで叩いて砕いて食べたい出がある。それがやみつきになった。昔は低峰にキジやヤマドリがたくさんいた。低峰だとススキの中で、わさ（罿）によいか（キジやヤマドリは）昔はようさんおつた。小学生でもわさかけに行つていた。朝早く起きてかかってないか見に行つてから学校行つた。低峰だけでなくどこでも。家の軒の周りによく出てきた。
		鳥	B氏	低峰でもどこでも産卵の時期に行くと、ヤマドリのメスがどどッと逃げる。そこに6〜7つの卵があり、持って帰った。小学校のころは日に2、3回往復することもある。
			A氏	ヤマドリをわざわざ捕つたり、卵を捕つたり。食べるため、キジ、ヤマドリの卵。チャボくらいの大きさはあった。捕って帰ると中にはヒヨコになっていているものもあった。これはあかと捨てよつた。
		罿	A氏	ヤマドリのわさ（罿）は「はねわな」といつて、木をしわらせて工夫をして、鳥が通ると、罿むとばさんと落ちて、足をしわせた木で引っ張って捕まえる方法。親父から教わつた。何回してもかからなかつた。うさぎを捕つた時の針金でやってみると、首をつつむが、毛が引っかかってにげてしまう。ワイヤーを二重にしてすると、掛かつた。
		マムシ	A氏	マムシはすごい体に良かった。マムシは何ほ食べたか。
			B氏	食べるし、傷の薬にも、マムシを焼酎に入れて直に死んでしまうが、それを何年も置いておく。それを傷口につけるとよく治る。
			A氏	マムシの皮を傷に巻く。あれは熱も取る。マムシは、山へ行つてマムシがいると木で頭を叩いて、生きているまま皮をむく。むいても動いてるが、むいた中にある「イ」、肝を男の人でも女の人でも先に飲む。そのまま飲む。皮むいたやつは竹にがいに、がいがいよう言うたらきれいに裂いて干す。身は竹に挟んで八の字にして持つて帰る。それを乾燥さす。私がよく食べたのは、もち米と黒豆とマムシを乾燥させたものを臼でひいてはったいい粉にする。それをしゃもじに1杯か2杯ずつ食べる。

付表 聞き取りの内容詳細一覧 () 内は調査者による注釈。

大項目	中項目	小項目	発言者	発言内容 (要約)
草原の利用		マムシ	B氏	肉はないので骨だけ。私の母親は茶碗蒸しに入れて食べてくれた。今の茶碗蒸しは卵やぎなんが入っているが、昔の茶碗蒸しは茶碗に入れておいただけ。卵も何もなくて、蒸すか炊くのか、お粗末なものしか入っていない。
		体験年代	A氏	(わさかけをしていたのは) 小学生の頃。終戦前後の。
		銃猟	A氏	猟師は昔からいた。裕福な人は大概(猟銃を)持っている。10人くらい。山へ炭焼きに行くとしんしの跡がすぐわかるから、隣のおじさんが猟しよったから伝えると。その山を囲んで追い込み猟をしていた。待ち場があつて。そこで待つとしんしが必ず出てくる。
		移動	A氏	39号線がついて変わって、昔は「はたざり」の下にある「はたざり橋」から旧道に入る道がある。そこを上がっていた。今の39号線は平成に入ってからできている。ダムができてるまではみんな歩いてた。
			A氏	草原は私が物心ついてから一人でやってた。39号線やなし、関西電力の管理道を進んで、途中から横畑を通って、約25分から30分で行ける道があった。けもの道のような道を炭焼きやカヤ刈りに行った、そういう道がある。昔は集落の下から20分ほどで行っていた。
	運搬	道具	A氏	昔は若いし、駆け足で上がるような感じ。ライトもなし。
			A氏	行きしは、おいそを背負っていった。昔はこれ(「おいそ」)が生活の物入れであつた。ナイロンなどがないから。昔は一枚一枚わらで編んでいる。山へ行くのも畑行くのもどこ行くのにも持っていた。これに荷物一体になると、いろんなものを入れて行く、まえかけ、どんごろし(麻袋)、などを入れて山へ行く。びくについてばい山菜を摘んで、まえかけに包んで、おいそでかけた。このようにして括って、積んで、どんごろし、まえかけ、山菜を積んでこのようにして山を下りていた。これを必ず持っていた。今の人は括り方を知ってない。
			B氏	昔は(「おいそ」のことを)よそ(で)は「おいこ」という。
	牧畜	飼育	A氏	昔は大概の家では牛が玄関の横に牛小屋があつた。財産がある家は牛小屋があつたが、普通の家は玄関の横にあつた。あれだけの砥峰を焼いて、その続きで各組に分かれてすつと焼きよつた。すごい広い場所。
			A氏	(牛は)田圃を耕すため(に飼っていた)。 (昭和35年頃は牛は)減っていた。もう耕耘機を使っていた。私は百姓していないから詳しくはわからないが、(昭和)30年代くらいから(牛からトラクターに一斉に変わった)。
集落での農林業の営み	放牧	放牧場所	A氏	昭和34年くらいまではそのようなこと(役牛の放牧)をやっていたが、その後は(放牧地は)植林になった。
				ススキ高原は砥峰だけが、4・5・6番組、1番組、2・3番組、という別に牛放し場があつた。1番は、一番奥の川上集落が切れたところで39号線カーブになっているところに、牛放し場とあって木戸があつた。大きな木の幹で、ワイヤーでつって戸を開け、その中へ牛を放す。牛がカヤのようなものを食べる場所があつた。2・3番は林組、お宮さんのちよと下にあつた。
				4・5・6番は横畑に木戸があつた。
	放牧の営み		A氏	砥峰高原のススキがあつた場所は茅を刈るための場所としてあつて、1〜6番組はまた別にあつた。そこ(横畑)は牛の放牧する場所。そこにもススキ大きなものがあつた。牛の餌を刈りに朝早くからそこに行きよつた。
			B氏	最寄、最寄で牛を放すところを決めてた。
			B氏	組で15〜6軒、朝放して晩に連れに行つた。
	放牧地での火入れ		A氏	高さ2mくらいの樺で丸太を組んで、ワイヤーでつって木戸を開けて、晩まで山で草を刈る。放牧中に番する人はいない、迎えに行つたら自分とこの牛はわかる。
			A氏	(現在の砥峰高原より)もつと地形が悪い。谷などがあつて、簡単などころではないが、牛にとつては極楽。4畳半に留められるより、野原で食べ放題、休み放題。(放牧場所は)広いから、ずっと(一日中は)食べていない、暑いときは日陰にいる。
			A氏	昼までに砥峰、同じ日に(放牧しているところも)火入れしていた。砥峰を焼いてから、それぞれ焼いていた。横畑はすごい広い所だから、よくああの山を屋から焼いたなと思う。勾配は45度くらいある。
	植林・牧畜	植林	A氏	(牛を放牧していた場所、植林した場所は)部落の山。川上集落の山。
			A氏	(昭和)35年くらいから(草地を)植林しはじめた。
	炭焼き	規模	B氏	その頃は杉の値がよかつたので植林、植林となつた。
			B氏	峯山は植林していない。雑木が大きくなって、スギではなくなほかの雑木ばかりある。
			B氏	川上は昔100戸ほどあつて今は72〜3軒だが、うち70軒ほど炭焼きしていた。それ以外の3割ほどの人は、木こり、ほん一部が役場、農協勤めだった。

付表 聞き取りの内容詳細一覧 () 内は調査者による注釈.

大項目	中項目	小項目	発言者	発言内容（要約）
集落での農林業の営み				
炭焼き	炭焼き	材	B氏	ナラのことをナラボウソ、ホウソという。ホウソでも2種類あり、ナラボウソは肌のきれいなもの。ホウソは肌が粗い。ナラとカシは別、サクラでも雑木は一緒でかさ木。
		材の伐採	A氏	当時はチェーンソーもないし、のこ、ナタだけ。のこが切れなくなったら、自分でめする。低峰の石は川上の人ほとんどが使っていた。私も親父と一緒に砥石を掘った。掘った穴がまだある。
		技術	A氏	炭焼きが上手かどうかすぐわかる。親父たちは朝早く起きて、炭焼きの窯の煙突を少しずつ開けていく。その間に木を切って、煙で焼けたな。煙突をちよと下げようなどを見てる。山の上になって、煙のにおいで焼けたかがわかる。
	炭焼窯		B氏	窯へ行くとき、寒いときは煙が上に上らずに谷を這う。煙のにおいでどの程度焼けたかが全部わかる。
			B氏	(焼いていたのは) 白炭。
			B氏	川上100戸いった時分に、70軒くらいが炭焼きしていた。山は一枚場と違って、300俵出る山から500、600も出る山まで大きさは決まっていないが、昔から窯があって。付近にここからここまですべてと印があってそれを一枚場と決めて借りていた。どこでも古い窯があって、古い窯の焼け土が残っているものを使って新しい窯を作らなったら、新しい土ばかりだと割れて落ちてしまう。新しいところ遠いところから古い窯のやけ土を採ってきて混ぜてせなだら割れて落ちてしまう。古い窯のあるところで一枚場いくらと決めて山の主から借りよった。どこの谷にもあった。
	営み		B氏	ここらは毎日朝行つて、木切つて、持つて降りて、焼けているやつを抱いて、火入れて、一晩行くまでに焼けてまう。炭になる。毎日その繰り返し。
			A氏	朝、親父は母親が起きるの遅かったら怒りよった。山には何時に行つて、煙の具合で煙突をおろして、広げていく。谷、山の空の煙のにおいでどのくらい焼けているかわかつた。早く行つて煙突の幅を広げないといけない。炭焼きの検査にきて、開けて、堅い炭、いい炭やと言われて、「良」など印がつけられる。品評会があった。一度品評会で賞をもらって喜んだ事を覚えてる。
			A氏	(炭焼きは) 年中やっていた。雨が降ろうが雪が降ろうが火が降ろうが関係ない。
	品質		A氏	炭も厳しかった。秀・優・良と規格がある。検査がきて、俵の中を見て、浅木と雑木、ホウソで値段が違う。浅木はサクラやリョウブなど。
			B氏	(炭は) ほとんど農協ばかりに出荷していた。集落で使うといつても、良い炭はみんな農協へ出荷していた。
			B氏	私が32歳の頃まで炭焼きしていた。夏冬なしに他の仕事せずに、炭焼きをしていた。20年の終戦から14～5年後の(昭和) 35～6年頃まで。ガス、練炭、豆炭が大きくなってきた。炭焼きはえらい仕事だったから誰もしたくない。うちは百姓ではなかったのでも田んぼはあれへんし畑はせずに、炭焼き一点張り。
	焼き畑	作物	A氏	(桑畑以外には) ダイコン、ソバ、キビ、アズキは「だいこばたけ」といって山でばかりしていた。木切った跡に。集落の中でダイコンなどはなかった。クワばかりで。山焼きに行つて、そこにダイコン蒔いて、ソバ蒔いて、キビ蒔いて、大抵やります。ダイコン蒔いて、びくに入れて背負うて、持ったことある。林の谷と、横谷で大きな山焼いて、31名でその山を管理して、ダイ(焼畑やっていた時期は) 炭焼きする前の頃、学校受けて間なしに。20年終戦の前後頃。一番物がなかった時代。
			B氏	(焼畑をしていたのは) スギの植林地(伐採跡地)。そのあと植え込みするの、枝や木切った先が残っているので、木を焼いてきれいにしてからダイコン畑にする。また2年ほどしてスギ植林した。
			A氏	何軒かで共有して畑をもっていた。山に畑も集落の中にクワ畑も持っていた。
	実施年代	場所	A氏	お婆さんがシシの番(イノシシから作物を守るための夜間監視) によく行っていた。アズキはよく食べられていた。夜に2～3人で交代でしていた。その当時はシカも何も食べなかった。
			A氏	シシが出てこないようにわめきよった。
			B氏	一斗缶を持ってがらがら鳴らして歩く。私は行っていないがお婆さんが。
	管理形態	シシ番	A氏	私はよく行っていた。あつちもこつちも、1カ所だけやのうて。
			B氏	イノシシはおつた。シシ番いうくらいやから。シシはミミズとって食うが花は食わない。

付表 聞き取りの内容詳細一覧 () 内は調査者による注釈.

大項目	中項目	小項目	発言者	発言内容(要約)
そのほか	時代背景		B氏	小学校が「新中」になる前, 高等科といていた時代, 3年生のころから学校で炭焼きばかりして, 学校に生えている木を炭焼きして, なくなれば山からとってきて, 上級生が木を切って, 私ら3年生が手渡して窯まで運ぶのに並んで作業していた. 2年生の時に戦争, 大東亜戦争がはじまり, 6年生の時に終戦. 一番ものがない時代. 1年, 2年生の頃は勉強したが, 3年生になったら運動場で豆を植えたり, ハトムギが流行って, ハトムギや大豆, イモなどを作った. 運動場は歩いて通る道で運動会も何もない.
	主要な産業		A氏	川上は昔, 明治初期くらいから蚕, 木挽きが主な仕事だったよう. 田圃以外の畑には桑の木ばかり. どこも畑は桑. そのクワによく穴があいて, シジュウカラ, ヤマガラが桑に巣を作っていた. それが捕りたくて, 部落中そうゆうこととしていた.
	環境	雪	A氏	(川上) 集落と上(砥峰高原)では気候が違ったり, 気温が違う. 昔は-15℃まで下がってた. ちよっと降っても50cm積もること
			A氏	昔砥峰にスキーしに遊びに行っていた. 中学校入ってから. スキーと言っても竹を四つに割って, 2本ずつ併せて長靴の入るベルトで括って作ったもの.